

〈書評と紹介〉 黒川伊織著 『帝国に抗する社会運動 : 第一次日本共産党の思想と運動』

Tatemoto, Hiroyuki / 立本, 紘之

(出版者 / Publisher)

法政大学大原社会問題研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

大原社会問題研究所雑誌 / 大原社会問題研究所雑誌

(巻 / Volume)

685

(開始ページ / Start Page)

71

(終了ページ / End Page)

75

(発行年 / Year)

2015-11-25

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00012612>

黒川 伊織著

『帝国に抗する社会運動』

——第一次日本共産党の思想と運動』

評者：立本 紘之

本書は2010年6月に神戸大学に提出された著者の博士論文「『第一次共産党論』史論」を元に加筆・修正を行い刊行された書籍である。本書の構成は、

序章 本書の課題と視座

第Ⅰ部 一九二〇年代前半の思想空間における
第一次共産党

第一章 合法メディアと非合法党——『改造』
と第一次共産党の関係を中心に——

第二章 唯物史観の受容と第一次共産党の同
時代認識——山川均を中心に——

第三章 第一次共産党の君主制認識——綱領
の文書に即して——

第四章 第一次共産党・日本在留朝鮮人共産
主義者と〈東洋革命〉の理念

第Ⅱ部 〈帝国に抗する社会運動〉としての第
一次共産党

第五章 帝国秩序の動揺と第一次共産党の成立

第六章 第一次共産党の再組織とコミンテル
ンの介入の本格化

第七章 国内外の執行機関の軋轢と合法無産
政党組織構想

第八章 合法無産政党組織計画の始動と非合
法党の解党

終章 〈帝国に抗する社会運動〉の射程

というように「思想史的叙述」中心の第Ⅰ部・
「運動史的叙述」中心の第Ⅱ部という2部8章
で、「思想史と運動史の交点に立つての叙述」(5
頁)により第一次共産党の思想と運動を考察す
ることを目指す形となっている。

*

以下本書の具体的な内容を見ていく。

序章では「第一次共産党とその周辺の人々の
営みを〈帝国に抗する社会運動〉と捉え直す」
即ち「一国的枠組みで語られがちであった当該
期の左派の思想と運動」を「同時代の東アジア
の空間の中」に開くという試み(3頁)の意義
を説明すべく従来の研究史の概括・整理を行っ
た上で、本研究での依拠資料とそれを踏まえて
の著者の新しい視座である、

①〈日本共産党史としての第一次共産党史の
叙述〉からの解放

②〈唯物史観の受容過程とその日本史研究へ
の適用過程〉の解明

③〈絶対主義的天皇制の打倒という理念の遡
及的投影〉からの解放

の3点が説明されている。

第一章では1920年前後の「第一次共産党の
成立に結実するマルクス主義思想」(34頁)の
考察が、旧来用いられて来た運動の合法機関紙
誌ではなく一般総合雑誌『改造』の論調を対象
になされている。その結果「左派社会運動の高
揚と軌を一にして誌面を急進化」(36頁)させ
ていく同誌の姿と、その誌面上で「労農ロシア」
とコミンテルンの動向が伝えられ、山川均ら第
一次共産党関係者による党活動を暗示する論稿
が掲載されることで、同誌が社会運動に関心を
持つ人々への宣伝活動の場として有効に機能し
ていたことが強調されている。

第二章では日本におけるマルクス主義理論、とりわけ「唯物史観」の受容について第一次共産党の指導者山川均を軸に、「講座派対労農派」という枠組みを離れての考察が試みられている。そして山川を始めとする当該期の理論家が唯物史観の日本史への適用とそれに基づく日本社会の現状認識を試みる中、それが時期によってどう変化したか（明治維新で「ブルジョア革命」達成、当該期は「近代資本家社会」との規定故に普選否認→コミンテルン「二二年綱領草案」に沿う形で「ブルジョア議会」でのデモクラシーを求める闘争容認）が、当該期の論考や第一次共産党・コミンテルンの動きと絡めて述べられている。

第三章では「第一次共産党を「三二年テーゼ」／講座派理論の呪縛から解放」（90頁）しつつ後の章の議論に繋げるべく、第一次共産党の4つの「綱領的文書」における「君主制認識」の問題について検討している。それにより当初君主制の問題は「後景に退けられた遺制」（92頁）だったが、コミンテルン起草の「二二年綱領草案」で「過渡期的スローガン」として提起されるも、荒畑寒村・佐野学ら起草の「二四年二月綱領草案」では「副次的要求」に留まった（96頁）との流れが示される。更に著者はこれらを踏まえて第一次共産党の「思想的到達点」としての「二四年二月綱領草案」の独自性、合法無産政党的「基本的綱領」との重なり合いなど、当該期の第一次共産党運動の自立性と日本社会主義運動の歴史的経験の継承という要素について強く言及している。

第四章では第一次共産党と日本在留朝鮮人共産主義者との関係について、「両者相互の連帯や理解の質」（124頁）という旧来の研究成果を前提にしつつ、両者の「出会い」に着目して考察を行っている。そして第一次共産党が成立当初から「プロレタリア・インタナショナルリズ

ム」に基づく「日本・朝鮮・中国のプロレタリアートの国際連帯」（127頁）を模索していたことや、日本在留朝鮮人の共産主義系社会運動団体である北星会が〈東洋革命〉という理念の下で第一次共産党と統一行動を取り、「植民地の解放と帝国本国の革命を連動させつつ展望」（134頁）して運動を展開していったこと、しかしその後コミンテルンの介入により第一次共産党が朝鮮人共産主義運動と「不可避免的に連動」（148頁）させられる中で朝鮮問題が後景化されたまま第一次共産党解党を迎え、戦後に繋がる朝鮮問題についての認識固定化に繋がっていったことなどが述べられている。

第五章では第一次共産党成立前の時期を中心とした日本人社会主義者の在外行動について述べられている。そこでは大杉栄・近藤栄蔵ら旧来からよく知られた人々へのコミンテルンの働き掛けや彼らの目指したもの及び、その在外活動を支えた「中国人・朝鮮人ネットワーク」による東アジアでの革命運動の連動の萌芽が語られる。そしてその前提を踏まえての「暁民共産党事件」の持つ国際性や、情勢変化に伴う日本国内でのアナキスト・サンジカリストと共産主義者の「結集」の失敗、シベリアでの日本人印刷工グループ・「日本共産党上海支部」を名乗る日本人清水一衛らの活動などの具体的事例が示されている。

第六章では1922年8月の第一次共産党第一回大会での組織化とその「最初の仕事」である「反議会主義的政治運動」について触れた後、同時期に設立されたコミンテルン執行委員会東方部極東ビューローの組織・活動及び、その中心人物ヴォイチンスキーを通じた第一次共産党とコミンテルンの関係緊密化が語られている。そしてコミンテルン起草の「二二年綱領草案」を踏まえた上での「合法無産政党组党」を巡る党内対立（荒畑寒村を軸に）の発生と終結、更

に当該期の第一次共産党の大きな活動の一つである日本労働総同盟への左翼化工作について記されている。

第七章では1923年6月5日の第一次共産党事件後のウラジオストク在外ビューロー設立と同時期の日本国内での臨時ビューロー設立の事実を述べた後、「合法無産政党的組織化」という以前からの懸案に対する在外ビューローの動きや臨時ビューローとの関係・荒畑寒村帰国問題などを巡る内部対立について触れられる。そして同年の関東大震災後の在外ビューローの対応や日本国内での第三回臨時党大会（臨時ビューロー解体・新執行委員会成立）とその決定（合法無産政党即時決定路線）に基づく第一次共産党の活動継続の模索について述べられた後、コミンテルンの総同盟への直接工作及び、それを巡る第一次共産党側との懸隔について言及されている。

第八章では第三回臨時党大会で事実上「在外ビューローが切り捨て」（249頁）られたことを受けての在外ビューロー側の反応及び、コミンテルンの日本情勢認識のずれに伴うコミンテルンと新執行部の対立を経ての1924年初頭の在外ビューロー解体について述べた後、日本国内での合法無産政党組織計画の進展と「政治研究会」の発足へ話を移す。そして同年4月の第一次共産党の突然の解党及び、その直前の内部事情説明（「山川あつての党」（260頁）だった現状・内部の複数の対立軸の存在）がなされ、その後のヴォイチンスキーらが主導したコミンテルンの党再建の動きに触れる形で章を終える。

終章では各章の内容に即した本著の実証的成果の確認（272～275頁）を経た後、本著の意義について、

- ①コミンテルンとの関係を前提として第一次共産党史を実証的に描き直したこと
- ②帝国日本の支配秩序に対する抵抗として第

一次共産党の運動を位置づけ直したこと

- ③唯物史観に基づく同時代社会の認識が成立してくる過程と、その認識に基づく変革の展望が形成されてくる過程とを、あわせて明らかにしたこと

の3つであると述べている。そしてこれらを踏まえた今後の展望として、

- ・「一九二〇年代後半から三〇年代への展望」
 - ①日本資本主義論争への歴史的文脈
 - ②戦時広域圏論への歴史的文脈
 - ③「君主制」から「天皇制」への認識の転換
- ・「短い二〇世紀」後半への展望」
 - ①帝国日本の解体・東アジア冷戦と〈帝国に抗する社会運動〉の終焉
 - ②「五〇年分裂」・朝鮮戦争と運動史の叙述
 - ③ベトナム戦争と〈帝国に抗する社会運動〉の再生

と大きく2つに分けた時期に対する考察のビジョンを示し、本著を締め括る形となっている。

*

以上が本著の具体的内容の概括であるが、ここからは評者が感じた疑問点などを述べていく。

本著は「これまで自伝・回想録や官憲文書のみによって描かれてきた第一次共産党史を」「新出のコミンテルン日本共産党ファイルによって描き直した」（275頁）ことを意義として強調する点からも窺えるように、新規資料に基づく極めて実証的な研究であり、その点を大きく評価すべきなのは言うまでもない。しかしながらその関係で「思想史的叙述」中心の第Ⅰ部に比べて、「運動史的叙述」中心の第Ⅱ部に著者の主張があまり見えて来ず、新しい物を多分に含むとは言え事実の時系列的展開を中心とした構成になっているように感じられる。

「思想史と運動史の交点に立っての叙述」であり、運動史の研究者・思想史の研究者双方にとっ

て疑問に思う所があり得るとの前置きを著者は行っている（５頁）が、前後半の落差はそれだけでは少し説明が付き難い。学術書に対してある種不適当な感じ方かもしれないが、前半の「思想史的叙述」部分の面白さで引き付けられた読者が、後半の「運動史的叙述」部分で少し違和感を覚えてしまうのは避けられないかもしれない。二部構成の強みとも言えるし弱みとも言えるが、この前後半で趣きが変わるスタイルは本著の大きな特徴と言ってよいだろう。とは言え評者としては少し気になった部分である。

また本著第二章で著者は、山川均を中心とする第一次共産党の理論家における唯物史観認識・革命段階の規定とそれに伴う方針転換についての考察を行っている。だがその考察対象となっている思想は、第一章において「労農ロシア」の宣伝という問題を取り上げているにも拘らず、ロシア革命の原動力となった「マルクス・レーニン主義」ではなくそれ以前の「マルクス主義」である。「二年綱領」によるコミンテルンからの示唆が加わった事は示されているが、同章において山川とソヴィエト・ロシアの革命思想の関係についてほぼ言及されていないことは評者にとって気になる部分である。

旧来「講座派対労農派」という枠組みに規定され、山川の「レーニン主義」に関する方面もまた、研究として取り上げられてこなかったという伊藤晃の言説を章の冒頭で引用している（67～68頁）にも拘らず、著者は考察の焦点を山川の「日本資本主義の現状把握」の方に合わせたためこのような形になったのだろうか。山川のロシア理論受容に関しては、本著とほぼ同時期に刊行された石河康国『マルクスを日本で育てた人 評伝・山川均 I』（社会評論社、2014年）などに詳しく、本著第二章と合わせて読むことで当該期の山川の理論的受容への理

解を深めることが出来よう。山川のロシア理論受容に対する第二章での記述の少なさは、既存研究とは違う観点を示そうとする著者の意欲の現れとも取れるが、評者が感じた次の疑問点との関係を考えると「マルクス・レーニン主義」には第一次共産党より後の固定化された運動・思想状況の萌芽が窺えるため、第一次共産党期の運動多様性について語る上で差し障りがあるという意識が働いたのではないかと考えられなくもない。この辺り評者は少し疑問に感じた。

更に「今後の展望」の「短い二〇世紀」後半への展望で著者は「〈帝国に抗する社会運動〉」の抵抗の枠組みはコミンテルン以来の一国一党主義が転換される1955年まで継続した（285～287頁）とした上で、主に朝鮮人運動や中国・朝鮮との関係を軸に据えた国際的視野で考え、「一国的党史の枠組を投影」しないことの重要性を強調している。この点に関して評者は異論を差し挟むものではない。しかし1920年代後半から少なくとも1935年まで（著者が「再建共産党期」（280頁）と呼称する時期）、そして1945年以降というのは著者が考察した第一次共産党の後継組織だが、その性質を大きく変えた日本共産党という組織が日本国内に存在している時期である。「一国的党史の枠組」は著者にとって否定すべきもののなのかもしれないが、それ自体を考察の外に完全に置くことは出来ないのではなかろうか。

著者は「党史それ自体」でなく「より一般的な思想・運動史」を見据えた方向に強い関心を持った上で展望を語っている（280頁）ようだが、その意識性こそが「第一次共産党史」をここまで精緻に実証的に考察・再検討した著者をしてその後の共産党史から距離を置き、戦後に繋がる運動にダイレクトに繋いでしまうビジョンを生んだように窺えてならない。第一次共産

党より後の（現在までの）日本共産党に連なる運動はある種固定化したもので、それ以前の自由闊達な運動期にこそ現代に繋がる運動の萌芽があると考えるが故に、この時期を現代社会の諸問題及びそれに纏わる諸運動と直接接続することを志向する研究は、特に冷戦崩壊後の社会運動研究により顕著に見られるようになった。こうした研究動向自体は多様化の現れとして大きく評価すべきであろう。

しかしながらその根底にあるのが、第一次共産党より後の共産党は「党史」的記述に見られるような、一定の方向性に向かって意識付けされ固定化された運動だという前提であるのなら、評者は疑問符を付けざるを得ない。本雑誌の書評欄への寄稿などの場で評者は、度々第一次共産党より後の共産党運動をも再考する必要性を述べてきたが、本著のように精緻に実証的な考察・再検討を成し得た著者なのであるから、是非共第一次共産党以降の運動をも再検討し「党史の枠内から解放」（18頁）する方向にもその研究・考察の視座を広げることを評者は

切に願うものである。研究者としての興味・関心の問題などはあろうが、評者が著者とその研究を高く評価するが故のものと考えて頂ければ幸いである。

*

以上評者の疑問点などについて若干述べてきたが、本著は第一次共産党史研究の現時点における到達点の一つとして極めて有意義な一冊となっている。資料や研究史の整理・後の研究への視点・読み物としての面白さ・実証的叙述、そのいずれを取っても優れた書籍であり、日本を中心とした1920年代の社会運動に興味・関心を抱く方を主として是非一読頂きたい書籍なのは間違いないであろう。

（黒川伊織著『帝国に抗する社会運動——第一次日本共産党の思想と運動』有志舎、2014年11月、ix頁+317頁+7頁、定価6,000円+税）
（たてもと・ひろゆき 法政大学大原社会問題研究所 兼任研究員）